

I am a Cat – Chapter 2a (Natsume Sōseki)

に
一

わがはい しんねんらいたしょうゆうめい ねこ はな たか かん
吾輩は新年来多少有名になったので、猫ながらちょっと鼻が高く感ぜらるるのはありがたい。

がんちょうそうそうしゅじん もと いちまい えはがき き かれ こうゆうぼうが か ねんしじょう
元朝早々主人の許へ一枚の絵端書が来た。これは彼の交友某画家からの年始状である
が、じょうぶ あか かぶ ふかみど ぬ まんなか いつ どうぶつ うずくま
が、上部を赤、下部を深緑りで塗って、その真中に一の動物が蹲踞しているところをパス
テルで書いてある。主人は例の書齋でこの絵を、横から見たり、縦から眺めたりして、うま
いろ いちおうかんぶく おも
い色だなという。すでに一応感服したものだから、もうやめにするかと思うとやはり横から
見たり、縦から見たりしている。からだをねむむ けむり ねむり ねむり て の としより さんぜそう
見たり、縦から見たりしている。からだを拗じ向けたり、手を延ばして年寄が三世相を見るよ
うにしたり、またはまど ほう へむいて鼻の先まで持って来たりして見ている。はや
ひざ ゆ けん呑 こと どうよう はげ
ないと膝が揺れて陰呑でたまらない。ようやくの事で動揺があまり劇しくなくなったと思
たら、ちい こえ いったいなに い
たら、小さな声で一体何をかいたのだろうと云う。主人は絵端書の色には感服したが、か
いてある動物のしょうたい わか くしん
てある動物の正体が分らぬので、さっきから苦心をしたものと見える。そんな分らぬ絵端書
かと思ひながら、ね め じょうひん なか ひら おちつき ほんら まぎ じぶん
寝ていた眼を上品に半ば開いて、落ちつき払って見ると紛れもない、自分
のしょうぞう 肖像だ。主人のようにアンドレア・デル・サルトをきこ
きこめ込んだものでもあるまいが、画家
だけにけいたい しきさい ととの でき だれ そうい すこ がんしき
だけに形体も色彩もちゃんと整って出来ている。誰が見たって猫に相違ない。少し眼識の
あるものなら、うち ほか はんぜん りっぱ か
猫の中でも他の猫じゃない吾輩である事が判然とわかるように立派に描いてあ
る。このくらいめいりょう
明瞭な事を分らずにかくまで苦心するかと思うと、少し人間が気の毒にな
る。でき
出来る事ならその絵が吾輩であると云う事を知らしてやりたい。吾輩であると云う事はよ
し分らないにしても、せめて猫であるという事だけは分らしてやりたい。しかし人間というも
のとうていわがはいねごぞく げんご かい う てん めぐみ よく ざんねん
のは到底吾輩猫属の言語を解し得るくらいに天の恵に浴しておらん動物であるから、残念
ながらそのままにしておいた。

ちよっとどくしゃ ことわ がんらいにんげん なに ねこねこ こと けいぶ
ちょっと読者に断っておきたいが、元来人間が何ぞという猫々と、事もなげに軽侮の
くちょう わがはい ひょうか くせ
口調をもって吾輩を評価する癖があるははなはだよくない。人間の糟から牛と馬が出来て、
牛と馬のくそ せいぞう かんが じぶん むち ころづ こうまん かお
糞から猫が製造されたごとく考へるのは、自分の無智に心付かんで高慢な顔をす
るきょうし
教師などにはありがちの事でもあろうが、はたから見てあまり見つともいい者じゃない。い
くら猫だって、そまつかんべん め いちれついったい びょうどうむさべつ
そう粗末簡便には出来ぬ。よそ目には一列一体、平等無差別、どの猫も

自家固有の特色などはないようであるが、猫の社会に這入って見るとなかなか複雑なもので
十人十色という人間界の語はそのままここにも応用が出来るのである。目付でも、鼻付
でも、毛並でも、足並でも、みんな違う。髯の張り具合から耳の立ち按排、尻尾の垂れ加減
に至るまで同じものは一つもない。器量、不器量、好き嫌い、粹無粋の数を悉くして
千差万別と云っても差支えないくらいである。そのように判然たる区別が存しているにもか
かわらず、人間の眼はただ向上とか何とかいって、空ばかり見ているものだから、吾輩の
性質は無論相貌の末を識別する事すら到底出来ぬのは気の毒だ。同類相求むとは昔しから
ある語だそうだがその通り、餅屋は餅屋、猫は猫で、猫の事ならやはり猫でなくては分らぬ。
いくら人間が発達したってこればかりは駄目である。いわんや實際をいうと彼等が自ら信じ
ているごとくえらくも何ともないのだからなおさらむずかしい。またいわんや同情に乏しい
吾輩の主人のごときは、相互を残りなく解するというが愛の第一義であるということすら分
らない男なのだから仕方がない。彼は性の悪い牡蠣のごとく書齋に吸い付いて、かつて外界
に向って口を開いた事がない。それで自分だけはすこぶる達観したような面構をしているの
はちょっとおかしい。達観しない証拠には現に吾輩の肖像が眼の前にあるのに少しも悟っ
た様子もなく今年も征露の第二年目だから大方熊の画だろうなどと気の知れぬことをいってす
ましているのでもわかる。

吾輩が主人の膝の上で眼をねむりながら考えていると、やがて下女が第二の絵端書を持
って来た。見ると活版で舶来の猫が四五疋ずらりと行列してペンを握ったり書物を開いた
り勉強をしている。その内の一疋は席を離れて机の角で西洋の猫じゃ猫じゃを躍ってい
る。その上に日本の墨で「吾輩は猫である」と黒々とかいて、右の側に書を読むや躍るや猫
の春一日という俳句さえ認められてある。これは主人の旧門下生より来たので誰が見たっ
て一見して意味がわかるはずであるのに、迂濶な主人はまだ悟らないと見えて不思議そうに首
を捻って、はてな今年も猫の年かなと独言を言った。吾輩がこれほど有名になったのを未だ
気が着かずにいると見える。

ところへ下女がまた第三の端書を持って来る。今度は絵端書ではない。恭賀新年とかいて、
傍らに乍恐縮かの猫へも宜しく御伝声奉願上候とある。いかに迂濶な主人でもこ
う明らさまに書いてあれば分るものと見えてようやく気が付いたようにフンと言いながら吾輩

かお めつき いま ちが たしょうそんけい い ふく おも
の顔を見た。その眼付が今までとは違って多少尊敬の意を含んでいるように思われた。今ま
せけん そんざい みと きゅう いっこ しんめんぼく ほど まった
で世間から存在を認められなかった主人が急に一個の新面目を施こしたのも、全く吾輩の
おかげ しとう
御蔭だと思えばこのくらいの眼付は至当だろうと考える。

もん こうし な おおかたらいきやく
おりから門の格子がチリン、チリン、チリリリンと鳴る。大方来客であろう、来客なら下
とりつぎ で さかなや うめこう としき こと き へいき
女が取次に出る。吾輩は肴屋の梅公がくる時のほかは出ない事に極めているのだから、平気
で、もとのごとく主人の膝に坐っておった。すると主人は高利貸にでも飛び込まれたように
ふあん かおつき げんかん ほう なん ねんが きやく う さけ あいて いや
不安な顔付をして玄關の方を見る。何でも年賀の客を受けて酒の相手をするのが厭らし
い。人間もこのくらい偏屈になれば申し分はない。そんなら早くから外出でもすればよい
にんげん へんくつ もう ぶん はや がいしゆつ
のにそれほど勇氣も無い。いよいよ牡蠣の根性をあらわしている。しばらくすると下女が
ゆうき な かき こんじょう
来て寒月さんがおいでになりましたという。

かんげつ おとこ しゅじん きゅうもんかせい いま がっこう そつぎょう
この寒月という男はやはり主人の旧門下生であったそうだが、今では学校を卒業して、
なん りっぱ はな わけ ところ
何でも主人より立派になっているという話しである。この男がどういう訳か、よく主人の所
あそ く じぶん おも おんな あ な よ なか おもしろ
へ遊びに来る。来ると自分を恋っている女が有りそうな、無さそうな、世の中が面白そう
な、つまらなそうな、すごい つや もんく なら かえ
な、つまらなそうな、凄いやな艶っぽいような文句ばかり並べては帰る。主人のようなしな
びかけた人間を求めて、わざわざこんな話しをしに来るのからして合点が行かぬが、あの
にんげん もと がてん ゆ
牡蠣的主人がそんな談話を聞いて時々相槌を打つのはなお面白い。

ごぶきた じつ きょねん くれ おおい かつどう で
「しばらく御無沙汰をしました。実は去年の暮から大に活動しているものですから、出よう
出ようと思っても、ついこの方角へ足が向かないので」と羽織の紐をひねくりながら謎見た
おも ほうかく あし む はおり ひも なぞみ
ような事をいう。「どっちの方角へ足が向くかね」と主人は真面目な顔をして、黒木綿の紋付
こと ませじめ かお くろもめん もんつき
羽織の袖口を引張る。この羽織は木綿でゆきが短かい、下からべんべらが左右へ五分くら
そでぐち ひっぱ みじ した もの さゆう ごぶ
いずつはみ出している。「エへへへ少し違った方角で」と寒月君が笑う。見ると今日は前歯が
だ すこ ちが くん わら きょう まえば
一枚欠けている。「君歯をどうかしたかね」と主人は問題を転じた。「ええ実はある所で
いちまい か は もんだい てん
椎茸を食ましてね」「何を食ったって?」「その、少し椎茸を食ったんで。椎茸の傘を前歯
しいたけ く なにか かさ
で噛み切ろうとしたらぼろりと歯が欠けましたよ」「椎茸で前歯がかけるなんざ、何だか爺々
か き じじ
臭いね。俳句にはなるかも知れないが、恋にはならんようだな」と平手で吾輩の頭を軽く叩
くさ はいく し こい ひらて わがはい あたま かる たた
く。「ああその猫が例のですか、なかなか肥ってるじゃありませんか、それなら車屋の黒に
ねこ れい ふと くるまや くら

だって負けそうもありませんね、立派なものだ」と寒月君は大に吾輩を賞める。「近頃大分大きくなったのさ」と自慢そうに頭をぼかぼかなぐる。賞められたのは得意であるが頭が少々痛い。「一昨夜もちよいと合奏会をやりましてね」と寒月君はまた話しをもとへ戻す。「どこで」「どこでもそりや御聞きにならんでもよいでしょう。ヴァイオリンが三挺とピアノの伴奏でなかなか面白かったです。ヴァイオリンも三挺くらいになると下手でも聞かれるものですね。二人は女で私 がその中へまじりましたが、自分でも善く弾けたと思いました」「ふん、そしてその女というのは何者かね」と主人は羨ましそうに問いかける。

元来主人は平常枯木寒巖のような顔付はしているものの実のところは決して婦人に冷淡な方ではない、かつて西洋の或る小説を読んだら、その中にある一人物が出て来て、それが大抵の婦人には必ずちよつと惚れる。勘定をして見ると往來を通る婦人の七割弱には恋着するという事が諷刺的に書いてあったのを見て、これは真理だと感心したくらいな男である。そんな浮気な男が何故牡蠣的生涯を送っているかと云うのは吾輩猫などには到底分らない。或人は失恋のためだとも云うし、或人は胃弱のせいだとも云うし、また或人は金がなくて臆病な性質だからだとも云う。どっちにしたって明治の歴史に関係するほどの人物でもないのだから構わない。しかし寒月君の女連れを羨まし気に尋ねた事だけは事実である。寒月君は面白そうに口取の蒲鉾を箸で挟んで半分前歯で食い切った。吾輩はまた欠けはせぬかと心配したが今度は大丈夫であった。「なに二人とも去る所の令嬢ですよ、御存じの方じゃありません」と余所余所しい返事をする。「ナール」と主人は引張ったが「ほど」を略して考えている。寒月君はもう善い加減な時分だと思ったものか「どうも好い天気ですな、御閑ならごいっしょに散歩でもしましょうか、旅順が落ちたので市中は大変な景気ですよ」と促がして見る。主人は旅順の陥落より女連の身元を聞きたいと云う顔で、しばらく考え込んでいたがようやく決心をしたものと見えて「それじゃ出るとしよう」と思い切った立つ。やはり黒木綿の紋付羽織に、兄の紀念とかいう二十年來着古るした結城紬の綿入を着たままである。いくら結城紬が丈夫だって、こう着つづけではたまらない。所々が薄くなって日に透かして見ると裏からつぎを当てた針の目が見える。主人の服装には師走も正月もない。ふだん着も余所ゆきもない。出るときは懐手をしてぶらりと出る。ほかに着る物がないからか、有っても面倒だから着換ええないのか、吾輩には分らぬ。ただしこれだけは失恋のためとも思われぬ。

ふたりでい わがはい しっけい かんげつくん く き かまぼこ のこ ちょうだい
両人が出て行ったあとで、吾輩はちょっと失敬して寒月君の食い切った蒲鉾の残りを頂戴
した。吾輩もこの頃では普通一般の猫ではない。まず桃川如燕以後の猫か、グレーの金魚を
ぬす しかく じゅうぶん おも くるまや くる もと がんちゅう
偷んだ猫くらいの資格は充分あると思う。車屋の黒などは固より眼中にない。蒲鉾の
ひときれ
一切くらい頂戴したって人からかれこれ云われる事もなからう。それにこの人目を忍んで
かんしょく くせ なに われらねごぞく かぎ おさん さいくん
間食をするという癖は、何も吾等猫族に限った事ではない。うちの御三などはよく細君の
るすちゅう もちがし
留守中に餅菓子などを失敬しては頂戴し、頂戴しては失敬している。御三ばかりじゃない現に
じょうひん しつけ う ふいちょう こども けいこう
上品な仕付けを受けつつあると細君から吹聴せられている小児ですらこの傾向がある。
しごにちまえ ふたり こども ばか はや め さ しゅじんふうふ ね
四五日前のことであったが、二人の小供が馬鹿に早くから眼を覚まして、まだ主人夫婦の寝て
あいだ むか あ しよくたく つ かれら まいあさ く パン いくぶん さとう
いる間に対合うて食卓に着いた。彼等は毎朝主人の食う麵麩の幾分に、砂糖をつけて食
うのが例であるが、この日はちょうど砂糖壺が卓の上に置かれて匙さえ添えてあった。いつも
のように砂糖を分配してくれるものがないので、大きい方がやがて壺の中から一匙の砂糖を
すくい出して自分の皿の上へあけた。すると小さいのが姉のした通り同分量の砂糖を
どうほうほう じぶん さら ちい あね とお どうぶんりょう
同方法で自分の皿の上にあけた。少らく両人は睨み合っていたが、大きいのがまた匙をとつ
て一杯をわが皿の上に加えた。小さいのもすぐ匙をとってわが分量を姉と同一にした。する
と姉がまた一杯すくった。妹も負けずに一杯を附加した。姉がまた壺へ手を懸ける、妹がま
た匙をとる。み ま かさ ふたり やまもり
見ている間に一杯一杯一杯と重なって、ついには二人の皿には山盛の砂糖が
うずたか あま ね まなこ
堆くなって、壺の中には一匙の砂糖も余っておらんようになったとき、主人が寝ぼけ眼を
こす しんしつ で き だ もと
擦りながら寝室を出て来てせっかくしゃくい出した砂糖を元のごとく壺の中へ入れてしまっ
た。こんなところを見ると、人間は利己主義から割り出した公平という念は猫より優ってい
るかも知れぬが、ちえ おと
智慧はかえって猫より劣っているようだ。そんなに山盛にしないうちに早く
な
嘗めてしまえばいいにと思ったが、例のごとく、吾輩の言う事などは通じないのだから、気の
どく おはち だま けんぶつ
毒ながら御櫃の上から黙って見物していた。

かんげつくん で か しゅじん ある ばんおそ かえ き よくじつしよくたく
寒月君と出掛けた主人はどこをどう歩いたものか、その晩遅く帰って来て、翌日食卓に
つ くじごろ れい おはち うえ はいけん
就いたのは九時頃であった。例の御櫃の上から拝見していると、主人はだまって雑煮を食っ
ている。か 代えては食い、代えては食う。もち き ちい なん むきれ ななきれ
餅の切れは小さいが、何でも六切か七切食って、
さいご ひとき わん なか のこ はし お たんに わがまま
最後の一切れを椀の中へ残して、もうよそうと箸を置いた。他人がそんな我儘をすると、な
かなか しょうち いこう ふ ま とくい かれ にご する こ
かなか承知しないのであるが、主人の威光を振り廻わして得意なる彼は、濁った汁の中に焦

ただ しがい み へいき さいくん ふくろど おく だ
げ 爛れた餅の死骸を見て平気ですましている。妻君が袋戸の奥からタカジヤスターゼを出し
たく
て卓の上に置くと、主人は「それは利かないから飲まん」という。「でもあなた 澱粉質のもの
たいへんこうのう
には大変 機能が ある ですから、召し上ったらいいでしょ」と飲ませたがる。「澱粉だ
らうが何だろうが駄目だよ」と頑固に出る。「あなたはほんとに厭きっぽい」と細君が ひとりごと
のようにいう。「厭きっぽいじゃない 薬 が利かんのだ」「それだってせんだってじゅうは大
変によく 利くよく 利くと おっしゃって 毎日 毎日 上った じゃありませんか」「こないだ うち
は 利いたのだよ、この頃は利かないのだよ」と対句のような返事をする。「そんなに 飲んだり 止
めたり しちゃ、いくら 機能のある 薬でも 利く 気遣いは ありません、もう 少し 辛防が よくな っ
ちゃあ 胃弱 なんぞは ほかの 病気 たあ 違って 直らない わねえ」とお盆を持って 控えた 御三を
いじゃく びょうき ちが なお ほん も ひか おさん
かえり 顧みる。「それは 本当の ところで ございます。もう 少し 召し上って ご覧 にならないと、とて
よ 悪い 薬か 悪い 薬か わかります まい」と御三は 一も 二もなく 細君の 肩を持つ。「何でも いい、
飲まんの だから 飲まんの だ、女 なんかに 何が わかる ものか、黙 っている」「どうせ 女 です
わ」と細君が タカジヤスターゼを 主人の 前へ 突き 付けて 是非 詰腹を 切らせ ようとする。主人は
何にも 云わず 立って 書齋へ 這入る。細君と 御三は 顔を見 合せて にやにやと 笑う。こんな ときに
あと から っ 付いて 行って 膝の上へ 乗ると、大変 な 目に 逢わ される から、そつと 庭から 廻って 書
齋の 椽側へ 上って 障子の 隙から 覗いて 見ると、主人は エピクテタス とか 云う 人の 本を 抜いて
えんがわ あが しょうじ すき のぞ み い ひと ほん ひら
見て おった。もし それが 平常の 通り わかる なら ちよつと えらい ところがある。五 六分 すると そ
この 本を 叩き 付ける ように 机の上へ 抛り 出す。大方 そんな 事 だろうと 思いながら な お 注意 して
たると、今 度は 日記帳 を 出して 下 の ような 事 を 書き つけた。

かんげつ ねづ うえの いけ はた かんだへん さんぼ まちあい まえ げいしゃ すそもよう はるぎ
寒月と、根津、上野、池の端、神田辺を散歩。池の端の待合の前で芸者が裾模様の春着を
はね きて 羽根をついていた。衣装は 美しいが 顔は すこぶる ますい。何となく うちの 猫に 似てい
た。

なに 何も 顔の ますい 例に 特に 吾輩を 出さ なく っても、よさ そうな ものだ。吾輩 だって 喜多床へ 行
って 顔さ え 剃って 貰やあ、そんなに 人間と 異った ところは ありや しない。人間は こう 自惚れて
いる から 困る。

ほうたん かど まが ひとり き せい なでがた かつこう できあが
宝丹の角を曲るとまた一人芸者が来た。これは背のすらりとした撫肩の恰好よく出来上っ
た女で、着ている 薄紫の衣服も素直に着こなされて上品に見えた。白い歯を出して笑
いながら「源ちゃん昨夕は——つい忙がしかつたもんだから」と云った。ただしその声は
たびがらす しゃが ふうさい おおい げらく かん
旅鴉のごとく皴枯れておったので、せつかくの風采も大に下落したように感ぜられたか
ら、いわゆる源ちゃんなるもののいかなる人なるかを振り向いて見るも面倒になって、
ふとこゝろで おなりみち で
懐手のまま御成道へ出た。寒月は何となくそわそわしているごとく見えた。

しんり げ がた しゅじん いま こゝろ おこ う
人間の心理ほど解し難いものはない。この主人の今の心は怒っているのだから、浮かれている
のだから、または哲人の遺書に一道の慰安を求めつつあるのか、ちつともわからない。世の中を
れいしょう てつじん いしよ いちどう いあん もと わか よ なか
冷笑しているのか、世の中へ交りたいのだから、くだらぬ事に肝癩を起しているのか、物外
に超然としているのだからさっぱり見当がつかぬ。猫などはそこへ行くと単純なものだ。食
いたければ食い、寝たければ寝る、怒るときは一生懸命に怒り、泣くときは絶体絶命に泣
く。第一日記などという無用のものは決してつけない。つける必要がないからである。主人
のように裏表のある人間は日記でも書いて世間に出されない自己の面目を暗室内に発揮する
必要があるかも知れないが、我等猫属に至ると行住坐臥、行屎送尿ことごとく真正の日記
であるから、別段そんな面倒な手数をして、己れの真面目を保存するには及ばぬと思う。日
記をつけるひまがあるなら椽側に寝ているまでの事さ。

ぼうてい ばんさん ひさ ぶ まさむね にさんばいの けさ い ぐあい たいへん
神田の某亭で晚餐を食う。久し振りで正宗を二三杯飲んだら、今朝は胃の具合が大変い
い。胃弱には晩酌が一番だと思ふ。タカジヤスターゼは無論いかん。誰が何と云つても
だめ
駄目だ。どうしたって利かないものは利かないのだ。

むやみ こうげき ひと けんか けさ かんしゃく
無暗にタカジヤスターゼを攻撃する。一人で喧嘩をしているようだ。今朝の肝癩がちょっと
ここへ尾を出す。人間の日記の本色はこう云う辺に存するのもかも知れない。

まるまる あさめし はい い ゆ にさんち み へら
せんだって〇〇は朝飯を廃すると胃がよくなると云うたから二三日朝飯をやめて見たが腹
がぐうぐう鳴るばかりで機能はない。△ △ は是非香の物を断てと忠告した。彼の説
によるとすべて胃病の原因は漬物にある。漬物さえ断てば胃病の源を涸らす訳だから
ほんぶく うたがい ろんぼう いっしょうかん はし ふ
本復は疑なしという論法であった。それから一週間ばかり香の物に箸を触れなかった

が別段の験も見えなかったから近頃はまた食い出した。X Xに聞くとそれは按腹揉療治に限る。ただし普通のではゆかぬ。皆川流という古流な揉み方で二度やらせれば大抵の胃病は根治出来る。安井息軒も大変この按摩術を愛していた。坂本竜馬のような豪傑でも時々治療をうけたと云うから、早速上根岸まで出掛けて揉まして見た。ところが骨を揉まなければ癒らぬとか、臓腑の位置を一度顛倒しなければ根治がしにくいとかいって、それはそれは残酷な揉み方をやる。後で身体が綿のようになって昏睡病にかかったような心持ちがしたので、一度で閉口してやめにした。A君は是非固形体を食うなどという。それから、一日牛乳ばかり飲んで暮して見たが、この時は腸の中でどぼりどぼりと音がして大水でも出たように思われて終夜眠れなかった。B氏は横膈膜で呼吸して内臓を運動させれば自然と胃の働きが健全になる訳だから試しにやって御覧という。これも多少やったが何となく腹中が不安で困る。それに時々思い出したように一心不乱にかかりはするものの五六分立つと忘れてしまう。忘れまいとすると横膈膜が気になって本を読む事も文章をかく事も出来ぬ。美学者の迷亭がこの体を見て、産気のついた男じゃあるまいし止すがいいと冷かしたからこの頃は廢してしまった。C先生は蕎麦を食ったらよかろうと云うから、早速かけともりをかざるがわる食ったが、これは腹が下るばかりで何等の機能もなかった。余は年来の胃弱を直すために出来得限りの方法を講じて見たがすべて駄目である。ただ昨夜寒月と傾けた三杯の正宗はたしかに利目がある。これからは毎晩二三杯ずつ飲む事にしよう。

これも決して長く続く事はあるまい。主人の心は吾輩の眼球のように間断なく変化している。何をやっても永持のしない男である。その上日記の上で胃病をこんなに心配している癖に、表向は大に瘦我慢をするからおかしい。せんだってその友人で某という学者が尋ねて来て、一種の見地から、すべての病氣は父祖の罪惡と自己の罪惡の結果にほかならないと云う議論をした。大分研究したものと見えて、条理が明晰で秩序が整然として立派な説であった。気の毒ながらうちの主人などは到底これを反駁するほどの頭脳も学問もないのである。しかし自分が胃病で苦しんでいる際だから、何とかかんとか弁解をして自己の面目を保とうと思った者と見えて、「君の説は面白いが、あのカーライルは胃弱だったぜ」とあたかもカーライルが胃弱だから自分の胃弱も名誉であると云ったような、見当違いの挨拶をした。すると友人は「カーライルが胃弱だって、胃弱の病人が必ずカーライルにはなれない

さ」と極め付けたので主人は黙然としていた。かくのごとく虚栄心に富んでいるものの実際はやはり胃弱でない方がいいと見えて、今夜から晩酌を始めるなどというのはちょっと滑稽だ。考えて見ると今朝雑煮をあんなにたくさん食べたのも昨夜寒月君と正宗をひっくり返した影響かも知れない。吾輩もちょっと雑煮が食って見たくなった。

吾輩は猫ではあるが大抵のものは食う。車屋の黒のように横丁の肴屋まで遠征をする気力はないし、新道の二絃琴の師匠の所の三毛のように贅沢は無論云える身分でない。従って存外嫌は少ない方だ。小供の食いこぼした麩も食うし、餅菓子の餡もなめる。香の物はすこぶるまづいが経験のため沢庵を二切ばかりやった事がある。食って見ると妙なもので、大抵のものは食える。あれは嫌だ、これは嫌だと云うのは贅沢な我儘で到底教師の家にいる猫などの口にすべきところでない。主人の話しによると仏蘭西にバルザックという小説家があったそうだ。この男が大の贅沢屋で——もっともこれは口の贅沢屋ではない、小説家だけに文章の贅沢を尽したという事である。バルザックが或る日自分の書いている小説中の人間の名をつけようと思っいろいろつけて見たが、どうしても気に入らない。ところへ友人が遊びに来たのでいっしょに散歩に出掛けた。友人は固より何も知らずに連れ出されたのであるが、バルザックは兼ねて自分の苦心している名を目付ようという考えだから往来へ出ると何もしないで店先の看板ばかり見て歩いている。ところがやはり気に入った名がない。友人を連れて無暗にあるく。友人は訳がわからずにくっついて行く。彼等はついに朝から晩まで巴理を探険した。その帰りがけにバルザックはふとある裁縫屋の看板が目についた。見るとその看板にマーカスという名がかいてある。バルザックは手を拍って「これだこれだこれに限る。マーカスは好い名じゃないか。マーカスの上へZという頭文字をつける、すると申し分のない名が出来る。Zでなくてはいかん。Z. Marcusは実にうまい。どうも自分で作った名はうまくつけたつもりでも何となく故意とらしいところがあって面白くない。ようやくの事で気に入った名が出来た」と友人の迷惑はまるで忘れて、一人嬉しがったというが、小説中の人間の名前をつけるに一日巴理を探険しなくてはならぬようでは随分手数のかかる話だ。贅沢もこのくらい出来れば結構なものだが吾輩のように牡蠣的主人を持つ身の上ではとてもそんな気は出ない。何でもいい、食べさえすれば、という気になるのも境遇のしからしむるところであろう。だから今雑煮が食いたくなったのも決して贅沢の結果ではない、何でも食

える時に食っておこうという考から、主人の食い剰した雑煮がもしや台所に残ってはいはずまいかと思ひ出したからである。……台所へ廻って見る。

今朝見た通りの餅が、今朝見た通りの色で椀の底に膠着している。白状するが餅というものは今まで一辺も口に入れた事がない。見るとうまそうにもあるし、また少しは気味がわるくもある。前足で上にかかっている菜っ葉を掻き寄せる。爪を見ると餅の上皮が引き掛ってねばねばする。嗅いで見ると釜の底の飯を御櫃へ移す時のような香がする。食おうかな、やめようかな、とあたりを見廻す。幸か不幸か誰もいない。御三は暮も春も同じような顔をして羽根をついている。小供は奥座敷で「何とおっしゃる兔さん」を歌っている。食うとすれば今だ。もしこの機をはずすと来年までは餅というものの味を知らずに暮してしまわねばならぬ。吾輩はこの刹那に猫ながら一の真理を感得した。「得難き機会はずべての動物をして、好まざる事をも敢てせしむ」吾輩は実を云うとそんなに雑煮を食いたくはないのである。否椀底の様子を熟視すればするほど気味が悪くなって、食うのが厭になったのである。この時もし御三でも勝手口を開けたなら、奥の小供の足音がこちらへ近付くのを聞き得たなら、吾輩は惜気もなく椀を見棄てたろう、しかも雑煮の事は来年まで念頭に浮ばなかったろう。ところが誰も来ない、いくら蹶蹶していても誰も来ない。早く食わぬか食わぬかと催促されるような心持がする。吾輩は椀の中を覗き込みながら、早く誰か来てくれればよいと念じた。やはり誰も来てくれない。吾輩はどうとう雑煮を食わなければならぬ。最後にからだ全体の重量を椀の底へ落すようにして、あぐりと餅の角を一寸ばかり食い込んだ。このくらい力を込めて食い付いたのだから、大抵なものなら噛み切れる訳だが、驚いた！もうよかろうと思って歯を引こうとすると引けない。もう一辺噛み直そうとすると動きがとれない。餅は魔物だなと疳づいた時はすでに遅かった。沼へでも落ちた人が足を抜こうと焦慮るたびにぶくぶく深く沈むように、噛めば噛むほど口が重くなる、歯が動かなくなる。歯答えはあるが、歯答えがあるだけでどうしても始末をつける事が出来ない。

美学者迷亭先生がかつて吾輩の主人を評して君は割り切れない男だといった事があるが、なるほどうまい事をいったものだ。この餅も主人と同じようにどうしても割り切れない。噛んでも噛んでも、三で十を割るごとく尽未来際方のつく期はあるまいと思われた。この煩悶の際吾輩は覚えぬ第二の真理に逢着した。「すべての動物は直覺的に事物の適不適

を予知す」真理はすでに二つまで發明したが、餅がくっ付いているので毫も愉快を感じない。歯が餅の肉に吸収されて、抜けるように痛い。早く食い切って逃げないと御三が来る。小供の唱歌もやんだようだ、きっと台所へ馳け出して来るに相違ない。煩悶の極尻尾をぐるぐる振って見たが何等の機能もない、耳を立てたり寝かしたりしたが駄目である。考えて見ると耳と尻尾は餅と何等の關係もない。要するに振り損の、立て損の、寝かし損であると気が付いたからやめにした。ようやくの事これは前足の助けを借りて餅を払い落とすに限ると考え付いた。まず右の方をあげて口の周囲を撫で廻す。撫でたくらいで割り切れる訳のものではない。今度は左りの方を伸して口を中心として急劇に円を劃して見る。そんな呪いで魔は落ちない。辛防が肝心だと思って左右交る交るに動かしたがやはり依然として歯は餅の中にぶら下っている。ええ面倒だと両足を一度に使う。すると不思議な事にこの時だけは後足二本で立つ事が出来た。何だか猫でないような感じがする。猫であろうが、あるまいがこうなった日にやあ構うものか、何でも餅の魔が落ちるまでやるべしという意気込みで無茶苦茶に顔中引っ掻き廻す。前足の運動が猛烈なのでややともすると中心を失って倒れかかる。倒れかかるたびに後足で調子をとらなくてはならぬから、一つ所にいる訳にも行かぬので、台所中あちら、こちらと飛んで廻る。我ながらよくこんなに器用に起っていられたものだと思う。

第三の真理が驀地に現前する。「危きに臨めば平常なし能わざるところのものを為し能う。之を天祐という」幸に天祐を享けたる吾輩が一生懸命餅の魔と戦っていると、何だか足音がして奥より人が来るような気合である。ここで人に来られては大変だと思って、いよいよ躍起となって台所をかけ廻る。足音はだんだん近付いてくる。ああ残念だが天祐が少し足りない。とうとう小供に見つけられた。「あら猫が御雑煮を食べて踊を踊っている」と大きな声をする。この声を第一に聞きつけたのが御三である。羽根も羽子板も打ち遣って勝手から「あらまあ」と飛込んで来る。細君は縮緬の紋付で「いやな猫ねえ」と仰せられる。主人さえ書斎から出て来て「この馬鹿野郎」といった。面白い面白いと云うのは小供ばかりである。そうしてみんな申し合せたようにげらげら笑っている。腹は立つ、苦しくはある、踊はやめる訳にゆかぬ、弱った。ようやく笑いがやみそうになったら、五つになる女の子が「御かあ様、猫も随分ね」といったので狂瀾を既倒に何とかするという勢でまた大変笑われた。人間の同情に乏しい実行も大分見聞したが、この時ほど恨めしく感じた

事はなかった。ついに天祐もどっかへ消え失せて、在来の通り四つ這になって、眼を白黒するの醜態を演ずるまでに閉口した。さすが見殺しにするのも気の毒と見えて「まあ餅をとってやれ」と主人が御三に命ずる。御三はもっと踊らせようじゃありませんかという眼付で細君を見る。細君は踊は見たいが、殺してまで見る気はないのでだまっている。「取ってやらんと死んでしまう、早くとってやれ」と主人は再び下女を顧みる。御三は御馳走を半分食べかけて夢から起された時のように、気のない顔をして餅をつかんでぐいと引く。寒月君じゃないが前歯がみんな折れるかと思った。どうも痛い痛くないのって、餅の中へ堅く食い込んでいる歯を情け容赦もなく引張るのだからたまらない。吾輩が「すべての安楽は困苦を通過せざるべからず」と云う第四の真理を経験して、けろけろとあたりを見廻した時には、家人はすでに奥座敷へ這入ってしまっておった。

こんな失敗をした時には内にて御三なんぞに顔を見られるのも何となくばつが悪い。いっその事気を易えて新道の二絃琴の御師匠さんの所の三毛子でも訪問しようとう所から裏へ出た。三毛子はこの近辺で有名な美貌家である。吾輩は猫には相違ないが物の情けは一通り心得ている。うちで主人の苦い顔を見たり、御三の険突を食って気分が勝れん時は必ずこの異性の朋友の許を訪問していろいろな話をする。すると、いつの間にか心が晴々して今までの心配も苦勞も何もかも忘れて、生れ変わったような心持になる。女性の影響というものは実に莫大なものだ。杉垣の隙から、いるかなと思っで見渡すと、三毛子は正月だから首輪の新しいのをして行儀よく椽側に坐っている。その背中の丸さ加減が言うに言われんほど美しい。曲線の美を尽している。尻尾の曲がり加減、足の折り具合、物憂げに耳をちょいちょい振る景色なども到底形容が出来ん。ことによく日の当る所に暖かそうに、品よく控えているものだから、身体は静肅端正の態度を有するにも関わらず、天鷲毛を欺くほどの滑らかな満身の毛は春の光りを反射して風なきにむらむらと微動するごとくに思われる。吾輩はしばらく恍惚として眺めていたが、やがて我に帰ると同時に、低い声で「三毛子さん三毛子さん」といいながら前足で招いた。三毛子は「あら先生」と椽を下りる。赤い首輪につけた鈴がちゃらちゃらと鳴る。おや正月になったら鈴までつけたな、どうもいい音だと感心している間に、吾輩の傍に来て「あら先生、おめでとう」と尾を左りへ振る。吾等猫属間で御互に挨拶をするときには尾を棒のごとく立てて、それを左りへぐるりと廻すので

ある。町内^{ちやうない}で吾輩^よを先生^{せんせい}と呼んでくれるのはこの三毛子^{さんけい}ばかりである。吾輩^{ぜんかいこと}は前回^{ぜんかいこと}断わった通り^{とお}まだ名^なはないのであるが、教師^{きやうし}の家^{うち}にいるものだから三毛子^{さんけい}だけは尊敬^{そんけい}して先生^{せんせい}先生^{せんせい}と
いってくれる。吾輩^いも先生^{まんざらわる}と云われて満更^{まんざらわる}悪い^{こころも}心持^{こころも}もしないから、はいはいと返事^{へんじ}をして
いる。「やあおめでとう、大層^{たいそうりっぱ}立派^{おけしやう}に御化粧^でが出来^{でき}ましたね」「ええ去年^{きよねん}の暮^{くれ}御師匠^{おんしやう}さんに
か^か買^いって頂^いいたの、宜^いいでしょ」とちやらちやら鳴らして見せる。「なるほど善^いい音^いですな、
吾輩^{うま}などは生^{うま}れてから、そんな立派^{こと}なものを見た事^{こと}がないですよ」「あらいやだ、みんなぶら
下^さげるのよ」とまたちやらちやら鳴らす。「いい音^{うれ}でしょ、あたし嬉^{うれ}しいわ」とちやらちや
らちやらちやら続^{つづ}け様^げに鳴らす。「あなたのうち^{つづけざま}の御師匠^{たいへん}さんは大^{たい}変^{へん}あなたを可^{かわい}愛^{あい}がっている
と見^{わがみ}えますね」と吾身^ひに引^ひきくらべて暗^{あん}に欣^{きん}羨^{せん}の意^いを洩^もらす。三毛子^{むじゃき}は無^む邪^{じゃ}気^きなものである
「ほんとよ、まるで自^じ分の^{ぶん}小^こ供^{ども}のようよ」とあどけなく笑^{わら}う。猫^{ねこ}だつて笑^{わら}わないとは限^{かぎ}らな
い。人^{にんげん}間は自^じ分^{ぶん}よりほかに笑^{わら}えるものが無^ないように思^{おも}っているのは間^{まちが}違^{ちが}いである。吾輩^よが笑^{わら}
うのは鼻^{はな}の孔^{あな}を三^{さん}角^{かく}にして咽^{のど}喉^{ぼとけ}仏^{しんどう}を震^{しん}動^{どう}させて笑^{わら}うのだから人^{にんげん}間^{かん}にはわ^わからぬはずである。
「一^い体^{たい}あなた^{なん}の所^{ところ}の御^{おん}主^{しゅ}人^{じん}は何^{なん}ですか」「あ^あら御^{おん}主^{しゅ}人^{じん}だつて、妙^{みよう}な^なのね。御^{おん}師^し匠^{じやう}さんだわ。
二^に絃^{げん}琴^{きん}の御^{おん}師^し匠^{じやう}さんよ」「それは吾輩^しも知^しっていますがね。その御^{おん}身^み分^{ぶん}は何^{なん}なんです。い^いずれ
昔^{むか}しは立^{かた}派^ぱな方^{かた}な^なんでしょな」「ええ」

君^{きみ}を待^まつ間^まの姫^{ひめ}小^こ松^{まつ}.....

障^{しょう}子^じの内^{うち}で御^{おん}師^し匠^{じやう}さんが二^に絃^{げん}琴^{きん}を弾^ひき出^だす。「宜^いい声^{こえ}でしょ」と三^{さん}毛^け子^こは自^じ慢^{まん}す。「宜^い
ようだが、吾輩^{わがはい}にはよ^よくわ^わからん。全^{ぜん}体^{たい}何^{なん}とい^いうもの^{もの}ですか」「あれ？ あれは何^{なん}と^とか^かつて
ものよ。御^{おん}師^し匠^{じやう}さんはあれが^{だい}好^{こう}きな^なの。.....御^{おん}師^し匠^{じやう}さんはあれで^{ろくじゅうに}六^{ろく}十^{じゅう}二^によ。随^{ずい}分^{ぶん}丈^{じやう}夫^ぶだわ
ね」六^{ろく}十^{じゅう}二^にで生^いきてい^いるくら^{くら}いだ^だから丈^{じやう}夫^ぶと云^いわね^ねば^ばなる^{なる}まい。吾輩^よは「はあ」と返^{へん}事^じをし
た。少^{すこ}し間^まが抜^ぬけた^たようだが別^{べつ}に名^{めい}答^{とう}も出^でて来^こな^なかつた^たから仕^{しかた}方^{かた}が^がない。「あれでも、も^もとは
身^み分^{ぶん}が大^{たい}変^{へん}好^{こう}かつた^たん^んだ^だつて。い^いつ^つでも^もそ^そう^うお^おっ^っし^しや^やる^るの」「へえ元^{もと}は何^{なん}だ^だつた^たん^んです」「何^{なん}
でも天^{てん}璋^{しょう}院^{いん}様^{さま}の御^{おん}祐^{ゆう}筆^{ひつ}の妹^{いもうと}の御^{おん}嫁^{よめ}に行^いつた^た先^{さき}の御^{おん}っ^っか^かさん^{さん}の甥^{おい}の娘^{むすめ}なん^んだ^だつて」「何^{なん}
です^すつて？」「あ^あの天^{てん}璋^{しょう}院^{いん}様^{さま}の御^{おん}祐^{ゆう}筆^{ひつ}の妹^{いもうと}の御^{おん}嫁^{よめ}にい^いつた^た.....」「なるほど。少^{すこ}し待^まつて^て下^{くだ}
さい。天^{てん}璋^{しょう}院^{いん}様^{さま}の妹^{いもうと}の御^{おん}祐^{ゆう}筆^{ひつ}の.....」「あ^あら^らそ^そう^うじ^じゃ^ゃない^いの、天^{てん}璋^{しょう}院^{いん}様^{さま}の御^{おん}祐^{ゆう}筆^{ひつ}の妹^{いもうと}の.....」
「よろしい分^{わか}りました天^{てん}璋^{しょう}院^{いん}様^{さま}の^ので^でし^しょう」「ええ」「御^{おん}祐^{ゆう}筆^{ひつ}の^ので^でし^しょう」「そ^そう^うよ」「御^{おん}嫁^{よめ}
に行^いつた」「妹^{いもうと}の御^{おん}嫁^{よめ}に行^いつた^たです^すよ」「そ^そう^うそ^そう^う間^{まちが}違^{ちが}つた^た。妹^{いもうと}の御^{おん}嫁^{よめ}に入^いつた^た先^{さき}の」「御^{おん}

っかさんの甥の娘なんですとさ」「御っかさんの甥の娘なんですか」「ええ。分ったでしょ
う」「いいえ。何だか混雑して要領を得ないですよ。話るところ天璋院様の何になるんです
か」「あなたもよっぽど分らないのね。だから天璋院様の御祐筆の妹の御嫁に行った先きの御
っかさんの甥の娘なんだって、先っきっから言ってるんじゃないやありませんか」「それはすっかり
分っているんですがね」「それが分りさえすればいいんでしょう」「ええ」と仕方がないから
降参をした。吾々は時とすると理詰の虚言を吐かねばならぬ事がある。

障子の中で二絃琴の音がぱったりやむと、御師匠さんの声で「三毛や三毛や御飯だよ」と呼
ぶ。三毛子は嬉しそうに「あら御師匠さんが呼んでいらっしゃるから、私し帰るわ、よくっ
て？」わるいと云ったって仕方がない。「それじゃまた遊びにいらっしゃい」と鈴をちゃらち
やら鳴らして庭先までかけて行ったが急に帰って来て「あなた大変色が悪くってよ。どう
かしやしなくって」と心配そうに問いかける。まさか雑煮を食って踊りを踊ったとも云われな
いから「何別段の事もあります、少し考え事をしたら頭痛がしてね。あなたと話しで
もしたら直るだろうと思って実は出掛けて来たのですよ」「そう。御大事になさいまし。さよ
うなら」少しは名残り惜し気に見えた。これで雑煮の元気もさっぱりと回復した。いい心持
になった。帰りに例の茶園を通り抜けようと思って霜柱の融けかかったのを踏みつけながら
建仁寺の崩れから顔を出すとまた車屋の黒が枯菊の上に背を山にして欠伸をしている。
近頃は黒を見て恐怖するような吾輩ではないが、話しをされると面倒だから知らぬ顔をして
行き過ぎようとした。黒の性質として他が己れを軽侮したと認むるや否や決して黙っていな
い。「おい、名なしの権兵衛、近頃じゃ乙う高く留ってるじゃあねえか。いくら教師の飯を
食ったって、そんな高慢ちきな面らあするねえ。人つけ面白くもねえ」黒は吾輩の有名にな
ったのを、まだ知らんと見える。説明してやりたいが到底分る奴ではないから、まず一応の
挨拶をして出来得る限り早く御免蒙るに若くはないと決心した。「いや黒君おめでとう。
不相変元気がいいね」と尻尾を立てて左へくると廻わす。黒は尻尾を立てたぎり挨拶もし
ない。

「何おめでてえ？ 正月でおめでたけりや、御めえなんざあ年が年中おめでてえ方だろ
う。気をつけろい、この吹い子の向う面め」吹い子の向うづらという句は罵詈の言語であるよ
うだが、吾輩には了解が出来なかった。「ちょっと伺がうが吹い子の向うづらと云うのはど
う云う意味かね」「へん、手めえが悪体をつかれてる癖に、その訳を聞きや世話あねえ、だか

しょうがつやろう こと 正月野郎だつて事よ」正月野郎は詩的であるが、その意味に至ると吹い子の何とかよりも
いっそうふめいりょう もんく 参考のためちよつと聞いておきたいが、聞いたつて明瞭な答弁は
え 得られぬに極まっているから、面と対つたまま無言で立つておつた。いささか手持無沙汰の体
である。するととつぜんくろ 突然黒のうちの神さんが大きな声を張り揚げて「おや棚へ上げて置いた 鮭
がない。大変だ。またあの黒の畜生が取つたんだよ。ほんとに憎らしい猫だつちやありやあ
しない。いま かえ 今に帰つて来たら、どうするか見ていやがれ」と怒鳴る。はつはる のどか くうき ぶえんりよ
に震動させて、えだ な 枝を鳴らさぬ君が御代を大に俗了してしまう。黒は怒鳴るなら、怒鳴りた
いだけ怒鳴っていると云わぬばかりに横着な顔をして、しかく あご まえ だ 四角な顔を前へ出しながら、あれを
聞いたかと合図をする。あいず 今までは黒との応対で気がつかなくつたが、見ると彼の足の下には
ひとき にせんさんりん そうとう 一切れ二銭三厘に相当する鮭の骨が泥だらけになつて転がっている。「君不相変やつてる
な」と今までの行き掛りは忘れて、つい感投詞を奉呈した。黒はそのくらいな事ではなかなか
きげん なお 機嫌を直さない。「何がやつてるでえ、この野郎。しゃけの一切や二切で相変らずたあ何
だ。ひと みく 人を見縊びつた事をいうねえ。はばか くらまや くら うで かわ みぎ
前足を逆かに肩の辺まで搔き上げた。「君が黒君だと云う事は、はじめから知つてるさ」「知
つてるのに、相変らずやつてるたあ何だ。何だてえ事よ」と熱いのを頻りに吹き懸ける。人間
ならむなぐら 胸倉をとられてこづ まわ 小突き廻されるところである。

しょうしょうへきえき ないしんこま こと 少々辟易して内心困つた事になつたなと思つていると、ふたた れい かみ おおごえ きこ
る。「ちよいと西川さん、おい西川さんてば、よう 用があるんだよこの人あ。ひた ぎゅうにく いっじん
持つて来るんだよ。いいかい、わかつたかい、わか 牛肉の堅くないところを一斤だよ」と牛肉注文
のこえ しりん せきばく やぶ 声が四隣の寂寞を破る。「へん年に一遍牛肉を誂えと思つて、いやに大きな声を出し
ゃあがらあ。とな きんじよ じまん 牛肉一斤が隣り近所へ自慢なんだから始末に終えねえ阿魔だ」と黒は嘲りなが
らよ あし ふんば 四つ足を踏張る。わがはい あいさつ 吾輩は挨拶のしようもないから黙つて見ている。「一斤くらいじゃあ、
しょうち で き 承知が出来ねえんだが、しかた と 仕方ねえ、いいから取つときや、いま く 今に食つてやらあ」と自分のため
に誂えたもののごとくいう。こんど ほんとう ごちそう けつこう 今度は本当の御馳走だ。結構結構」と吾輩はなるべく彼を帰
そうとする。「おめつちの知つた事じゃねえ。黙つていろ。うるせえや」と云いながらとつぜん
あとあし しもばしら くず やつ 後足で霜柱の崩れた奴を吾輩の頭へばさりと浴びせ掛ける。吾輩が驚ろいて、からだの泥
をはら ま かきね くぐ 払っている間に黒は垣根を潜つて、どこかへすがた かく 姿を隠した。おおかた ぎゅう ねらい い
ものであろう。

うち ぎしき なか はる しゅじん わら ごえ ようき あ
家へ帰ると座敷の中が、いつになく春めいて主人の笑い声さえ陽気に聞える。はてなと明け
はな えんがわ あが そば よ みな きやく き きれい わ
放した椽側から上って主人の傍へ寄って見ると見馴れぬ客が来ている。頭を奇麗に分けて、
もめん もんつき はおり こくら はかま つ しごくまじめ しよせいとい おとこ
木綿の紋付の羽織に小倉の袴を着けて至極真面目そうな書生体の男である。主人の手あぶ
りの角を見ると春慶塗りの巻煙草入れと並んで越智東風君を紹介致候水島寒月という
めいし なまえ ゆうじん しゅかく たいわ
名刺があるので、この客の名前も、寒月君の友人であるという事も知れた。主客の対話は
とちゅう ぜんご なん ぜんかい しょうかい びがくしゃめいてい
途中からであるから前後がよく分らんが、何でも吾輩が前回に紹介した美学者迷亭君の事
かん
に關しているらしい。

「それで面白い趣向があるからは是非いっしょに來いとおっしゃるので」と客は落ちついて云
う。「何ですか、その西洋料理へ行って午飯を食うのについて趣向があるというのですか」
しゅじん ちゃ つ た まえ お とき わたし
と主人は茶を續ぎ足して客の前へ押しやる。「さあ、その趣向というのが、その時は私にも
わか
分らなかったんですが、いずれあの方の事ですから、何か面白い種があるのだらうと思いま
して……」
おどろ
「いっしょに行きましたか、なるほど」「ところが驚いたのです」主人はそれ見た
か
かと云わぬばかりに、膝の上に乗った吾輩の頭をぽかと叩く。少し痛い。「また馬鹿な
ちゃばん み おとこ くせ きゅう
茶番見たような事なんでしょう。あの男はあれが癖でね」と急にアンドレア・デル・サル
ト事件を思い出す。「へへー。君何か変わったものを食おうじゃないかとおっしゃるので」「何
を食いました」「まず献立を見ながらいろいろ料理についての御話がありました」「詭らえ
ない前にですか」「ええ」「それから」「それから首を捻ってボイの方を御覧になって、どう
も変わったものもないようだなとおっしゃるとボイは負けぬ気で鴨のロースか小牛のチャップな
どは如何ですと云うと、先生は、そんな月並を食いにわざわざここまで来やしないとおっしゃ
るんで、ボイは月並という意味が分らんものですから妙な顔をして黙っていましたよ」「そ
うでしょう」「それから私の方を御向きになって、君仏蘭西や英吉利へ行くと随分天明調や
まんよう にほん はん お はい
万葉調が食えるんだが、日本じゃどこへ行ったって版で圧したようで、どうも西洋料理へ這入
る気がしないと云うような大氣燄で——全体あの方は洋行なすった事があるのですかな」
めいてい かね
「何迷亭が洋行なんかするもんですか、そりゃ金もあり、時もあり、行こうと思えばいつでも
行かれるんですがね。大方これから行くつものところを、過去に見立てた洒落なんでしょう
う」と主人は自分ながらうまい事を言ったつもので誘い出し笑をする。

きゃく はさまで感服した様子もない。「そうですか、私 はまたいつの間に洋行なさったかと思
って、つい真面目に拝聴していました。それに見て来たようになめくじのソップの御話や
蛙 のシチュの形容をなさるものですから」「そりゃ誰かに聞いたんでしょ、うそをつく事
はなかなか名人ですからね」「どうもそうのようで」と花瓶の水仙を眺める。少しく残念の
気色にも取られる。「じゃ趣向というのは、それなんですネ」と主人が念を押す。「いえそ
れはほんの冒頭なので、本論はこれからなのです」「ふーん」と主人は好奇的な感投詞を挟
む。「それから、とてもなめくじや蛙は食おうっても食べやしないから、まあトチメンボーく
らいなところで負けとく事にしようじゃないか君と御相談なさるものですから、私はつい何の
気なしに、それがいいでしょう、と行ってしまったので」「へー、とちめんぼうは妙ですな」
「ええ全く妙なのですが、先生があまり真面目だものですから、つい気がつきませんでした
とあたかも主人に向って僥忽を詫びているように見える。「それからどうしました」と主
人は無頓着に聞く。客の謝罪には一向同情を表しておらん。「それからボーにおイトチ
メンボーを二人前持って来いという、ボーがメンチボーですかと聞き直しましたが、先生は
ますます真面目な貌でメンチボーじゃないトチメンボーだと訂正されました」「なある。その
トチメンボーという料理は一体あるんですか」「さあ私も少しおかしいとは思いましたがいか
にも先生が沈着であるし、その上あの通りの西洋通でいらっしゃるし、ことにその時は洋
行なすったものと信じ切っていたものですから、私も口を添えてトチメンボーだトチメンボー
だとボーに教えてやりました」「ボーはどうしました」「ボーがね、今考えると実に滑稽な
んですがね、しばらく思案してましてね、はなはだ御気の毒様ですが今日はトチメンボーは
御生憎様でメンチボーなら御二人前すぐに出れますと云うと、先生は非常に残念な様子で、そ
れじゃせっかくここまで来た甲斐がない。

どうかトチメンボーを都合して食わせてもらおう訳には行くまいかと、ボーに二十銭銀貨をやら
れると、ボーはそれではともかくも料理番と相談して参りましょうと奥へ行きましたよ」
「大変トチメンボーが食いたかったと見えますね」「しばらくしてボーが出て来て真に
御生憎で、御誂ならこしらえますが少々時間がかかります、と云うと迷亭先生は落ちつ
いたもので、どうせ我々は正月でひまなんだから、少し待って食って行こうじゃないかと云
いながらポケットから葉巻を出してふかりふかり吹かし始められたので、私しも仕方がな

いから、^{ふところ} 懐 から^{にほんしんぶん} 日本新聞を出して^よ 読み出しました、すると^だ ボイはまた奥へ相談に行きましたよ」「いやに^{てすう} 手数料が掛りますな」と主人は^{しゅじん} 戦争の^{せんそう} 通信を^{つうしん} 読むくらいの^{いきごみ} 意気込で^{せき} 席を^{すず} 前める。

「するとボイがまた出て来て、^{ちかごろ} 近頃は^{ざいりょう} トチメンボーの^{ふつてい} 材料が^{かめや} 払底で^{よこはま} 亀屋へ行って^{よこはま} も横浜の^{じゅうごばん} 十五番へ行って^か も買われませんかから^{とうぶん} 当分の^{あいだ} 間は^{おあいにくさま} 御生憎様でと^き 気の^{どく} 毒そうに云うと、先生は^{こま} そりや^{こま} 困ったな、^き せつかく来たのになあ^{ほう} と私の^{ごらん} 方を^く 御覧になつて^{かえ} しきりに^く 繰り返さるので、私も^{だま} 黙っている^{わけ} 訳にも^{まい} 参りませんから、^{いかん} どうも^{きわま} 遺憾ですな、^{ちょうし} 遺憾^{あわ} 極るですなと^{あわ} 調子を^{あわ} 合せたのです」「ごもつともで」と主人が^{さんせい} 賛成する。^{なに} 何が^{わがはい} ごもつとも^{わが} だか^{わが} 吾輩には^{わが} わからん。「するとボイも^{うち} 気の^{うち} 毒だと^{うち} 見えて、その^{うち} 内材料が^{うち} 参りましたら、^{うち} どうか^{うち} 願います^{うち} っつて^{うち} んで^{うち} しょう。先生が^{つか} 材料は何^{つか} を^{つか} 使う^{つか} かねと^と 問われると^と ボイは^と へへへへと^と 笑つて^と 返事^と を^と しない^と んです。材料は^{にほんは} 日本派の^{はいじん} 俳人^{はいじん} だろうと^お 先生が^お 押し返して^お 聞くと^お ボイは^お へえさ^お ようで、^お それ^お だもの^お だから^お 近頃は^お 横浜へ^お 行って^お も^お 買われ^お ません^お ので、^お ま^お こと^お に^お お^お 氣^お の^お 毒^お 様^お と^お 云^お い^お ま^お し^お た^お よ」「アハハハ^お それ^お が^お 落^お ち^お ち^お なんです^お か、^お こ^お り^お や^お 面^お 白^お い」と^お 主人^お は^お い^お つ^お に^お な^お く^お 大^お き^お な^お 声^お で^お 笑^お う。^お 膝^お が^お 揺^お れ^お て^お 吾^お 輩^お は^お 落^お ち^お か^お かる。^お 主人^お は^お それ^お に^お も^お 頓^お 着^お なく^お 笑^お う。^お ア^お ン^お ド^お レ^お ア^お ・^お デ^お ル^お ・^お サ^お ル^お ト^お に^お 雇^お った^お の^お は^お 自^お 分^お 一^お 人^お で^お ない^お と^お 云^お う^お 事^お を^お 知^お った^お の^お で^お 急^お に^お 愉^お 快^お に^お な^お った^お も^お の^お と^お 見^お える。「^お それ^お から^お 二^お 人^お で^お 表^お へ^お 出^お る^お と、^お どう^お だ^お 君^お う^お ま^お く^お 行^お った^お ろ^お う、^お 橡^お 面^お 坊^お を^お 種^お に^お 使^お った^お と^お ころ^お が^お 面^お 白^お か^お ろ^お う^お と^お 大^お 得^お 意^お なんです。^お 敬^お 服^お の^お 至^お り^お です^お と^お 云^お っ^お て^お 御^お 別^お れ^お した^お よ^お う^お な^お も^お の^お の^お 実^お は^お 午^お 飯^お の^お 時^お 刻^お が^お 延^お び^お た^お の^お で^お 大^お 変^お 空^お 腹^お に^お な^お っ^お て^お 弱^お り^お ま^お した^お よ」「^お それ^お は^お 御^お 迷^お 惑^お でした^お ろ^お う」と^お 主人^お は^お 始^お め^お て^お 同^お 情^お を^お 表^お す^お る。^お これ^お には^お 吾^お 輩^お も^お 異^お 存^お は^お ない。^お しば^お ら^お く^お 話^お し^お が^お 途^お 切^お れ^お て^お 吾^お 輩^お の^お 咽^お 喉^お を^お 鳴^お ら^お す^お 音^お が^お 主^お 客^お の^お 耳^お に^お 入^お る。

^{とうふうくん} 東風君は^つ 冷め^つ た^つ くな^つ った^つ 茶^つ を^つ ぐ^つ っ^つ と^つ 飲^つ み^つ 干^つ して^つ 「^つ 実^つ は^つ 今^つ 日^つ 参^つ り^つ ま^つ した^つ の^つ は、^つ 少^つ 々^つ 先生^つ に^つ 御^つ 願^つ が^つ あ^つ っ^つ て^つ 参^つ った^つ の^つ で」と^つ 改^つ ま^つ る。「^つ は^つ あ^つ、^つ 何^つ か^つ 御^つ 用^つ で」と^つ 主人^つ も^つ 負^つ け^つ ず^つ に^つ 済^つ ます。

「^つ 御^つ 承^つ 知^つ の^つ 通^つ り、^つ 文^つ 学^つ 美^つ 術^つ が^つ 好^つ き^つ な^つ も^つ の^つ です^つ から……」^つ 「^つ 結^つ 構^つ で」と^つ 油^つ を^つ 注^つ す。「^つ 同^つ 志^つ だ^つ

^つ け^つ が^つ よ^つ り^つ ま^つ して^つ せん^つ だ^つ っ^つ て^つ から^つ 朗^つ 読^つ 会^つ と^つ い^つ う^つ の^つ を^つ 組^つ 織^つ し^つ ま^つ して、^つ 毎^つ 月^つ 一^つ 回^つ 会^つ 合^つ して^つ この^つ 方^つ 面^つ の^つ 研^つ 究^つ を^つ こ^つ れ^つ か^つ ら^つ 続^つ け^つ た^つ い^つ つ^つ も^つ り^つ で、^つ す^つ で^つ に^つ 第^つ 一^つ 回^つ は^つ 去^つ 年^つ の^つ 暮^つ に^つ 開^つ い^つ た^つ く^つ ら^つ い^つ で^つ あ^つ り^つ ます」「^つ ち^つ ょ^つ っ^つ と^つ 伺^つ っ^つ て^つ お^つ き^つ ま^つ すが、^つ 朗^つ 読^つ 会^つ と^つ 云^つ う^つ と^つ 何^つ か^つ 節^つ 奏^つ で^つ も^つ 附^つ け^つ て、^つ 詩^つ 歌^つ 文^つ 章^つ の^つ 類^つ を^つ 読^つ む^つ よ^つ う^つ に^つ 聞^つ え^つ ま^つ すが、^つ 一^つ 体^つ ど^つ ん^つ な^つ 風^つ に^つ や^つ る^つ ン^つ です」「^つ ま^つ あ^つ 初^つ め^つ は^つ 古^つ 人^つ の^つ 作^つ か^つ ら^つ は^つ 始^つ め^つ て、^つ 追^つ 々^つ は^つ 同^つ 人^つ の^つ 創^つ 作^つ な^つ ん^つ か^つ も^つ や^つ る^つ つ^つ も^つ り^つ です」「^つ 古^つ 人^つ の^つ 作^つ と^つ い^つ う^つ と^つ 白^つ 樂^つ 天^つ の^つ 琵琶^つ 行^つ の^つ よ^つ う^つ な^つ も^つ の^つ で^つ も^つ あ^つ る^つ ン^つ ですか」「^つ い^つ い^つ え」「^つ 蕪^つ 村^つ の^つ 春^つ 風^つ 馬^つ 堤^つ 曲^つ の^つ 種^つ 類^つ ですか」「^つ い^つ い^つ え」「^つ そ

れじゃ、どんなものをやったんです」「せんだつては近松の心中物をやりました」「近松？
あの浄瑠璃の近松ですか」近松に二人はない。近松といえば戯曲家の近松に極っている。それ
を聞き直す主人はよほど愚だと思っていると、主人は何にも分らずに吾輩の頭を叮嚀に撫
でている。藪睨みから惚れられたと自認している人間もある世の中だからこのくらいの誤謬
は決して驚くに足らんと撫でられるがままにすましていた。「ええ」と答えて東風子は主人
の顔色を窺う。「それじゃ一人で朗読するのですか、または役割を極めてやるのですか」
「役を極めて懸合でやって見ました。

その主意はなるべく作中の人物に同情を持ってその性格を發揮するのを第一として、そ
れに手真似や身振りを添えます。白はなるべくその時代の人を写し出すのが主で、御嬢さん
でも丁稚でも、その人物が出てきたようにやるんです」「じゃ、まあ芝居見たようなものじゃ
ありませんか」「ええ衣装と書割がないくらいなものですな」「失礼ながらうまく行きます
か」「まあ第一回としては成功した方だと思います」「それでこの前やったとおっしゃる
心中物という」と「その、船頭が御客を乗せて芳原へ行く所なんで」「大変な幕をやしま
したな」と教師だけにちょっと首を傾ける。鼻から吹き出した日の出の煙りが耳を掠めて
顔の横手へ廻る。「なあに、そんなに大変な事もないんです。登場の人物は御客と、船頭
と、花魁と仲居と遣手と見番だけですから」と東風子は平気なものである。主人は花魁とい
う名をきいてちょっと苦い顔をしたが、仲居、遣手、見番という術語について明瞭の智識が
なかったと見えてまず質問を呈出した。「仲居というのは娼家の下婢にあたるものですか
な」「まだよく研究はして見ませんが仲居は茶屋の下女で、遣手というのが女部屋の助役見
たようなものだろうと思います」東風子はさっき、その人物が出て来るように仮色を使うと云
った癖に遣手や仲居の性格をよく解しておらんらしい。「なるほど仲居は茶屋に隷属するもの
で、遣手は娼家に起臥する者ですね。次に見番と云うのは人間ですかまたは一定の場所を指
すのですか、もし人間とすれば男ですか女ですか」「見番は何でも男の人間だと思います」
「何を司どっているんですかな」「さあそこまではまだ調べが届いておりません。その内調
べて見ましょう」これで懸合をやった日には頓珍漢なもの出来るだろうと吾輩は主人の顔
をちょっと見上げた。主人は存外真面目である。

「それで朗読家は君のほかにもどんな人が加わったんですか」「いろいろおりました。花魁が
法学士のK君でしたが、口髯を生やして、女の甘ったるいせりふを使かうのですからちよつ
と妙でした。それにその花魁が癩を起すところがあるので……」「朗読でも癩を起さなくつ
ちや、いけないんですか」と主人は心配そうに尋ねる。「ええとにかく表情が大事ですか
ら」と東風子はどこまでも文芸家の気である。「うまく癩が起りましたか」と主人は警句を吐
く。「癩だけは第一回には、ちと無理でした」と東風子も警句を吐く。「ところで君は何の
役割でした」と主人が聞く。「私しは船頭」「へー、君が船頭」君にして船頭が務まるもの
なら僕にも見番くらいはやれると云ったような語気を洩らす。やがて「船頭は無理でしたか」
と御世辞のないところを打ち明ける。東風子は別段癩に障った様子もない。やはり沈着な
口調で「その船頭でせつかくの催しも竜頭蛇尾に終わりました。実は会場の隣りに女学生
が四五人下宿してしまっていてね、それがどうして聞いたものか、その日は朗読会があるという
事を、どこかで探知して会場の窓下へ来て傍聴していたものと見えます。私しが船頭の仮色
を使って、ようやく調子づいてこれなら大丈夫と思って得意にやっていると、……つまり
身振りがあまり過ぎたのでしょう、今まで耐えていた女学生が一度にわっと笑いだしたもの
ですから、驚ろいた事も驚ろいたし、極りが悪るい事も悪るいし、それで腰を折られてから、
どうしても後がつづけられないので、とうとうそれ限りで散会しました」第一回としては
成功だと称する朗読会がこれでは、失敗はどんなものだろうと想像すると笑わずにはいられ
ない。覚えず咽喉仏がごろごろ鳴る。主人はいよいよ柔かに頭を撫でてくれる。人を笑って
可愛がられるのはありがたいが、いささか無気味なところもある。

「それは飛んだ事で」と主人は正月早々弔詞を述べている。「第二回からは、もっと奮発
して盛大にやるつもりなので、今日出ましたのも全くそのためで、実は先生にも一つ
御入会の上御尽力を仰ぎたいので」「僕にはとても癩なんか起せませんよ」と消極的
の主人はすぐに断わりかける。「いえ、癩などは起していただかんでもよろしいので、ここに
賛助員の名簿が」と云いながら紫の風呂敷から大事そうに小菊版の帳面を出す。「これへ
どうか御署名の上御捺印を願いたいので」と帳面を主人の膝の前へ開いたまま置く。見ると
現今知名な文学博士、文学士連中の名が行儀よく勢揃いしている。「はあ賛成員になら
ん事ありませんが、どんな義務があるのですか」と牡蠣先生は掛念の体に見える。「義務と

もう べつだん ぜ ひ 申して別段是非願う事もないくらいで、ただ 御名前 だけを 御記入 下さって 賛成 の 意 さえ 御表 くださ ければそれで 結構 です。「そんなら 這入ります」と 義務 の かからぬ 事を知る や 否 や 主人 は 急に 気軽 になる。責任 さえないと 云う 事 が 分つて おれば 謀叛 の 連判 状 へでも 名 を 書き 入れ ますと 云う 顔付 を する。加 之 こう 知名 の 学者 が 名前 を 列ね ている 中 に 姓名 だけでも 入籍 させる のは、今 まで こんな 事 に 出 合 った 事 の ない 主人 にとっては 無上 の 光 榮 である から 返事 の 勢 の ある のも 無理 は ない。「ちょっと 失敬」と 主人 は 書齋 へ 印 を とりに 這入る。吾輩 は ぼたりと 畳 の 上 へ 落ちる。東風子 は 菓子皿 の 中 の カステラ を つまんで 一口 に 頬張る。モゴモゴ しばらくは 苦し そうです。吾輩 は 今朝 の 雑煮 事件 を ちょっと 思い 出す。主人 が 書齋 から 印形 を 持 っ て 出 て 来 た 時 は、東風子 の 胃 の 中 に カステラ が 落ち ついた 時 であ った。主人 は 菓子皿 の カステラ が 一切 足り なくな った 事 に は 気が 着 かぬ らしい。もし 気が つくと すれば 第一 に 疑 われる もの は 吾輩 であらう。